

創造から新天新地へー24 章でたどる神の救済史

9 章 「受難のしもべの預言」

イザヤ書 53 章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造（創 1 章）
- ②墮落（創 3 章）
- ③アブラハム 契約（創 12 章）
- ④出エジプト（出 12 章）
- ⑤ 荒野での律法付与（出 20 章）
- ⑥約束の地の征服（ヨシ 1 章）
- ⑦ダビデ契約（2 サム 7 章）

(2) 前回は列王記第二 25 章を取り上げた。

- ①王国の崩壊は、偶発的な軍事的敗北ではない。
- ②2 列 25 章は、長い霊的墮落の必然的帰結である。
- ③歴史的出来事の背後には霊的理由がある。

(3) 今回は、イザヤ書 53 章を取り上げる。

- ①イザヤ 42 章、49 章、50 章、53 章に現れる 4 つの「しもべの歌」
- ②53 章は、その頂点かつ完成形である
- ③「王なるメシア」と「受難のしもべ」という二重のメシア像
 - *ダビデ契約に基づく王的メシア像
 - *イザヤ 53 章に示される苦難のメシア
- ④旧約時代には、この二つが統合されずに並存していた。

(4) 救済史におけるイザヤ 53 章の位置づけ

- ①王国崩壊後に示された「希望の中心」
- ②政治的回復ではなく、霊的回復が先行する。

初臨のメシアは「受難のしもべ」として来られる。

イザヤ 53 章の構造を確認すると、それが分かる。

I. 受難のしもべの姿（53：1～9）

1. 1～3 節

Isa 53:1 私たちが聞いたことを、だれが信じたか。／【主】の御腕はだれに現れたか。

Isa 53:2 彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。／砂漠の地から出た根のように。／
彼には見るべき姿も輝きもなく、／私たちが慕うような見栄えもない。

Isa 53:3 彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、／悲しみの人で、病を知っていた。／人が
顔を背けるほど蔑まれ、／私たちも彼を尊ばなかった。

(1) 人々から拒絶されるしもべ

- ①「見るべき姿も輝きもない」
- ②宗教的・社会的期待からの完全な逸脱

(2) 身代わりとしての苦難

- ①「彼が負ったのは、私たちの病」（4節）
- ②苦難の原因が本人ではなく「私たち」にあること

(3) 沈黙するしもべ

- ①裁き場で自己弁護をしない（7節）。
- ②神の御心への完全な従順

II. 代償的贖いという核心

1. 4～6節

Isa 53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、／私たちの痛みを担った。／それなのに、私
たちは思った。／神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。

Isa 53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、／私たちの咎のために碎かれたの
だ。／彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、／その打ち傷のゆえに、私たちは癒や
された。

Isa 53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、／それぞれ自分勝手な道に向かって行っ
た。／しかし、【主】は私たちすべての者の咎を／彼に負わせた。

(1) 「私たちのために」という繰り返し

- ①贖いの主体は神
- ②対象は罪ある人間

(2) 旧約における代償概念の完成

- ①犠牲制度（レビ記）との連続性
- ②動物のいけにえでは到達できなかった最終的贖い

III. 神の主権と救済計画

1. 10節

Isa 53:10 しかし、彼を砕いて病を負わせることは／【主】のみこころであった。／彼が自分のいのちを／代償のささげ物とするなら、／未長く子孫を見ることができ、／【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。

(1) 「【主】のみこころであった」の意味

- ①偶発的悲劇ではない
- ②神の計画の中にある受難

(2) 苦難を通して実現する神の目的

- ①罪の赦し
- ②義といのちの付与

(3) 福音書の記者たちによる十字架刑の描写

- ①苦しみの大きさではなく、苦しみに意味に焦点を合わせている。

IV. 義とされる民の誕生

1. 11～12節

Isa 53:11 「彼は自分のたましいの／激しい苦しみのあとを見て、満足する。／わたしの正しいしもべは、／その知識によって多くの人を義とし、／彼らの咎を負う。

Isa 53:12 それゆえ、／わたしは多くの人を彼に分け与え、／彼は強者たちを戦勝品として分かち取る。／彼が自分のいのちを死に明け渡し、／背いた者たちとともに数えられたからである。／彼は多くの人の罪を負い、／背いた者たちのために、とりなしをする。」

(1) 「多くの者を義とする」という宣言

- ①行いではなく、しもべの働きによる義
- ②後の新しい契約への布石

(2) 勝利者としてのしもべ

- ①分捕り物を分ける王のイメージ
- ②受難の果てにある栄光

結論：今日の信者への適用

I. 私たちは「受難のしもべによって生かされている民」であることを認識する。

(1) 救いは、人間の努力によってではなく、神の側の犠牲によって成し遂げられた。

(2) 「自分がどれほど頑張っているか」ではなく、「どれほど大きな代価がすでに支払われたか」を覚えて生きるべきである。

(3) 信仰の土台は、「彼は私たちの背きのために刺された」という事実にある。

2. クリスチャンは「栄光に先立つ低さ」を通ることを自覚する。
 - (1) 受難のしもべは、拒絶され、誤解され、沈黙を強いられた。
 - (2) それは、神に見捨てられたからではなく、御心のただ中にあったから。
 - (3) 私たちも同じような道を通過する。
 - (4) 「低さ」は失敗のしるしではなく、神が働かれる通路である。
3. 苦しみを「神の手の中のもの」として受け止める。
 - (1) 苦難は、偶然でも無意味でもない。
 - (2) 理由がすぐに分からなくても、「神の主権の外にあるものではない」と信じる。
 - (3) 私たちの信仰は、苦しみの中で神を見失わない信仰である。
4. 「義とされた者」として生きる責任を自覚する。
 - (1) イザヤ 53 章は、「多くの者を義とする」という驚くべき宣言で終わる。
 - (2) 私たちは、法的に、決定的に義とされた存在である。
 - (3) 義とされるために生きるのではなく、義とされた者として生きる。
 - (4) 罪の赦しは免罪符ではなく、新しい歩みへの召命である。
 - (5) 私たちは、再臨のメシアが来られるのを待ちながら歩む民である。